

新たな出会いや気づきが人の成長を促す

さか い とおる
坂 井 徹*

1. はじめに

私が新潟県土木部に入った年は約36年前の昭和58年。前年には上越新幹線・大宮～新潟間が開業し、太平洋側と日本海側が超高速鉄道で初めて結ばれ、「国土の均衡ある発展」を目指して、様々な大規模プロジェクトが次々と完成し始めた頃であった。

以来、今日まで18の所属を経験する中、多くの「人」や「事」に巡り合えた。その中で自分を成長させてくれた「人」や感銘を受けた「事」などについて述べてみたい。

2. インフラ整備の哲学

新採用時の新潟県柏崎土木事務所で、河川担当の私が最初に学んだ事は災害対応であった。当時は河川の整備率は低く、小降雨でも頻繁に河岸決壊が発生した。被災箇所に向いては、手書きで見取平面図を作成し、紅白のポール2本を使って横断測量を行った。ただし、起終点の判定は先輩に委ねた。何やら「切りシロ」なるもので駆け引きがあるとのこと。そして手計算で積算し査定設計書を仕上げた。

さらに、災害査定では生まれて初めて履いた「地下足袋」でキビキビと指示に従い被災箇所を測定。査定官に対する「誠意の表し方」と先輩から教えられたが、まさか「地下足袋」が仕事における必需品だとは思ってもみなかった。

あれから36年、今やドローンが建設現場上空を自動飛行し、3次元で測量、そのデータはICT建機に送信され、重機が自動で作業、瞬時に施工管理データが出力される時代となった。

技術の進歩には隔世の感があるが、戦後の国土政

策において忘れてはならない人物がいる。「田中角栄」氏である。田中氏は高等小学校卒業後の約1年、東京へ出る前、柏崎土木事務所に勤務していたことを当時の事務所長から聞いた。田中氏の生家は当事務所管内の旧西山町にあり、「東京の目白の自宅から、3回交差点を曲がれば西山の我が家に着く」という田中氏の演説は、高速道路の威力を端的に伝えており、説得力に溢れていた。

写真-1は、新潟県魚沼地域と福島県南会津地域とを隔てる標高約800メートルにある国道252号「六十里越トンネル」の福島県側にある石碑。「会越の窓を開く」と田中氏が自ら揮毫したものである。

新潟県側の旧入広瀬村は5mの雪が積もる豪雪地、袋小路の村と言われ、昭和48年この峠道の全線開通により開かれた村となった。

田中氏は「豪雪地や離島などの開発利用は一般的な経済合理性で判断すべきでない」と一貫した政治哲学でインフラ整備を推進した。この考え方は、現在の公共事業においてもしっかり継承されている。



写真-1 六十里越峠開道記念碑

*新潟県 土木部 技監（土木部技術管理課長、長岡地域整備部長等を歴任）

3. 来たバスに乗れ

5年ほど前、建設系の民間雑誌に掲載された「発注者ランキング」において、新潟県が都道府県で最上位と位置づけられたことがあった。評価項目は多岐に渡るが、「近隣住民への対応」「進捗管理」「質問や相談への迅速な対応」「技術基準や法令の知識」等々、説明能力やマネジメント力、高い志や倫理観等が評価された結果と受け止めたい。

現在、本県の土木職の技術士取得率は約1割を超えた（土木職は約700名）。ところが25年ほど前、技術士は僅か3名しかおらず、これに危機感を持った先輩が「みず・遊び・かい」なる論文づくりの勉強会を立ち上げた。

私と「みず・遊び・かい」との関わりは、平成6年1月「超過洪水対策についてまとめよ」という当時の勉強会の会長からメールが届いたことが始まりであった。論理的に仕上げるには、十分な下調べも必要で、2ヶ月に1回の締切り間際はいつも七転八倒、徹夜したことも何回かあった。それでも「何のために？」と自問することもなく、単に意地だけで毎回提出し続けた。

「来たバスに乗った」だけの私は、先輩方がこの取組を通じて技術士を目指そうとしていたなどつゆ知らず。以来、約25年間「みず・遊び・かい」の活動が奏功して、現在70名を超える現役の技術士が誕生した。今は若い世代が互いを刺激し合って自発的に挑戦するようになり、好循環しつつある。

私もあの論文づくりの訓練が実ってか、平成11年度に合格出来た。当時の試験は、約1万字を丸1日かけて一心不乱に書き続けるもので、終了後、ペンだこの痛みと憔悴感は味わったことのない強烈なものであった。論理的な思考力と忍耐力は、あの時の「意地の論文づくり」の賜と、七転八倒した日々の意味がようやくわかった気がした。

技術士取得は大きな目標であるが、そのことがゴールではなく、取得プロセスを通じて論理的な思考力や倫理観を身につけ、説明責任を果たす上で必要な説明力や調整力を磨くことにある。

仕事においても、プライベートにおいても、先の

不安や打算的な思惑などが交錯して、一步踏み出せないことが多いかもしれないが、少ないチャンスや貴重な出会いを活かすには、素直に「来たバスに乗る」ことも自分を変える一步になると確信する。

現在、「みず・遊び・かい」の会長は私が引き継いでおり、定例会の開催（技術士試験勉強会）、土木部の技術力向上研修への講師派遣など、自己研鑽のための支援を継続している（表-1）。

表-1 「みず・遊び・かい」の取組

行事等	内容
「みず・遊び・かい」ニュース	技術士試験情報を2ヶ月1回配信
「みず・遊び・かい」定例会	技術士相互の情報交換、技術士を目指す人の勉強会
業務経歴票添削制度	試験申込時の業務経歴票（720字）を添削
模擬口頭試験	筆記試験を通過した人へ模擬口頭試験を実施
技術力向上研修へ講師派遣	資格取得の意欲向上を図る土木部研修へ講師派遣
県庁技術士会への参加	技術士相互の情報交換、技術士会北陸支部との連携
総合監理取得研修	総合監理取得を目指す人へ技術的支援

4. 「三方良し」は究極の品確法

平成29年9月、米国ユタ州で開催された全体最適のマネジメント理論TOCの国際大会で、本県の道路建設課の瀬戸課長補佐（当時）が日本代表として、本県の「三方良しの公共事業改革」について発表した（写真-2）。



写真-2 米国ユタ州にて新潟県の取組を発表

世界のビジネスリーダーや行政改革リーダーが集まるこの大会で、納税者に喜んでもらえる公共事業を行政と建設企業（受注者）が一緒になって考える

本県の「三方良し」の取組を紹介したもの。

近江商人の経営理念である「三方良し」を公共事業に当てはめてはどうかと、平成24年6月、私は新潟県建設業協会青年部から提案を受け、その内容を聞くと躊躇することなく上司や国に働きかけを行った。そして、8月には講師に岸良裕司氏を迎え、協会青年部主催で官民協働の勉強会が開催された。北陸地方整備局長や新潟県土木部長はじめ、本県土木部の若手職員も大勢参加して、岸良氏の指導のもと、模擬の「三方良しの公共事業」を体験した。

平成24年9月からは、先の勉強会の参加職員が伝道師となり、各地域機関で県職員や建設業協会員を対象に説明会を開催（延べ17回）。平成25年度からは、土木部の予算概要書に「三方良し」の取組スローガンを掲載し、以降、全国組織である「三方良し公共事業推進研究会」と連携し取組を進めてきた。

本県では、平成26年の品確法の改正以前から「片務性の解消」、「円滑な設計変更」、「低入札対策」等に積極的に取り組んできたことから、「三方良し」の取組は目からうろこであり、その後の品確法改正はむしろ自然な流れと受け止め、品確法の取組を深化させている。

5. ある人の生き様から学んだインフラ整備

インフラ整備の最大の目的は、ストック効果の長期発現である。施設が長期に渡って機能し、安全性や生産性の向上、環境改善に繋がることである。そのためには、インフラの適切な維持管理やニーズを踏まえた改善など、たゆまぬメンテナンスの継続が



写真－3 梅海山荘にて（中央：小野健氏）

必要である。

写真－3の中央の方をご存知でしょうか？山登りが好きな人はご存知の方が多いと思うが、登山家で地質学者の「小野健」氏である。5年ほど前に亡くなられたが、今から約10年前に梅海山荘の前で一緒に撮った写真である。

この時は、北アルプス朝日岳～親不知海岸まで約27kmの梅海新道を小野氏からガイドしていただいた。梅海山荘はその中間地点にある。梅海新道は小野さんとその仲間達が、今から約60年前に休日等を利用し、約10年の歳月をかけ手弁当で切り拓いた登山道である。その後、約40年もの間、その仲間達と維持管理を続けてきた。登山道は放っておけばすぐにもとのヤブにもどるもの。

梅海新道は親不知海岸から白馬岳へと、海拔ゼロメートルの日本海から標高3,000mの頂きへ通ずる日本で唯一無二の登山道として、全国の登山愛好家を惹きつけて止まない。

険しい尾根伝いのヤブ刈開拓から、その後のメンテナンスと、50年の日々の作業が評価され、「ようやく環境省がサポートしてくれるようになった」と、梅海山荘でビールを酌み交わしながら、小野さんから「50年の物語」を聞かせてもらった。気の遠くなる程の労苦を微塵も感じさせないユーモア溢れる小野さんの語り口調に、計り知れない人間力の大きさを感じた。

彼が残してくれた梅海新道の道づくりは、究極の道普請であり、インフラ整備とは何かを小野さんの「50年の物語」を通して確信することができた。

6. おわりに

この他にも、多くの人から刺激を受け、その都度自分に「足りないもの」を気付かせてもらった。全部が素直に受け入れられるものばかりではなかったが、気がなげれば成長もなかったと感じている。特に、公務員技術者として失われがちな、創造力や先見性を磨くためにも、大いに異質なジャンルの人達との交流を大切にしたい。